

# 三鷹市山本有三記念館館報

Yuzo Yamamoto Memorial Museum Report

号  
9 2013.9

## 山本有三草稿幅「不惜身命」

紹介

江戸時代が舞台の「不惜身命」は、有三にとって唯一の歴史短編小説です。

## 企画展 文学の彩り 山本有三作品の挿絵と装幀

2014年2月23日(日)まで



大正時代、劇作家として高い評価を得ていた山本有三は、1926(大正15)年に初の長編小説「生きとし生けるもの」を『朝日新聞』に連載します。当時の風俗を取り入れつつ、社会の諸相を対比的に描いた本作は大きな話題となりました。有三の長編小説の内、「生きとし生けるもの」「波」「風」「女の一生」「路傍の石」の5編はいずれも朝日紙上に発表されました。有三は常々「朝、新聞をみた時に挿絵がわるい」と、次ぎの回が書きにくい。新聞小説は挿絵と二人でやる二人三脚なのだから、なるたけ歩調のあつた人でないとやりにくい」と語っていました。読者が本文と共に目にするものだからこそ、有三も挿絵画家との関係を重視していたのではないでしょうか。

有三の著作の中には、川端龍子装幀の『女人哀詞』や中村研一装幀の『女の一生』など、大正・昭和期に活躍した画家が装幀を手がけたもののがいくつもあります。また建築家・白井景一の手による装幀も『眞実一路』や『無事』など4冊を数えます。他にも限定出版された特装本、文字組まで指示したという自選集などがあり、装幀にも強いこだわりを持っていたことがうかがえます。

作家が生み出した物語を、芸術家の挿絵や装幀が彩る。新聞小説や本という物理的な制約もある中、両者の共同作業によって作品世界が作られています。「読む」だけではない、文学を「見る」愉しみを探してみてはいかがでしょうか。



\*写真右より、『女人哀詞』四六書院1931年、『山本有三自選集』集英社1967年



山本有三草稿幅「不惜身命」  
原稿用紙・ペン 紙表装 W36.3×H94.5cm

主人公の下級武士・石谷十蔵は、負けん気が強く無くなっています。しかし上様の指南番を務める柳生又右衛門に「常づねいのちを惜しんでこそ、一大事の場あいに、はじめて不惜身命の働きができる」と諭されます。やがて島原の乱に上使の差し添えとして遣わされた十蔵は、兵糧攻めを続けるか、城攻めをするかの選択を迫られます。はたして十蔵がとった行動とは…。

十蔵の生き様を通して人生観の深化を描いた本作の初出は雑誌「キング」(1934年1月・3月号)で、短編集『瘤』(改造社 1935年)に所収されました。その後ふりがなの廃止を唱え、平易な表現を目指した有三は、改造社版に比べて4割の漢字制限をした改訂版を刊行。3年後、更に2割減らした改版を刊行しました。この書きかえは三鷹時代に行われたものです。

今回紹介する資料は、冒頭部分の原稿を掛軸に仕立てたものです。今年度新たに収蔵し、企画展の開催に合わせて初公開しています。

特別寄稿

# 建築と装丁のあいだ

白井原多

山本有三作品の装丁の中に建築家が手懸けたものがあつたことをご存知だろうか？

1939年の『山本有三全集』(岩波書店)、1941

松濤美術館設計などで知られる建築家・白井晟一（1905—1983）によるものである。

白井晟一の義兄で水墨画家の近藤浩一路が『眞実一路』の挿絵を描いていた関係から山本有三と知り合い、

『真実一路』では「挿絵 近藤浩一 路、装幀 南沢用介」

山本有三と白井晟一はともに偶然にも『ハウプトマン詩集』を所有しており、お互いにその装丁を好んで

表紙はベージュ色の和紙に、白い点四つを小さく表記

形にまとめて、全体的に昔ながらのものである。白井晟一はこれを機にその後も様々な装丁を手掛け、中央公論の所書の装丁、マーク・ザイム、自身の

作品集などの作品をのこした。『新篇 路傍の石』では題字も手がけている。

当時装丁は画家や図案家の仕事とされていましたが、本は、読みやすく、持ちやすく、また傷みにくいといつた素材、機能、構造から考えられるべきであるから、むしろ建築家の仕事であろうという白井晟一の意見に

山本有三が共鳴して裝丁を依頼したという。

の大半は東京大空襲で焼失した。

は20代のヨーロッパ留学時までさかのぼり、美術館や古書店で美しい本に眼をかがやかし続け、その後も渡欧時には製本用のマーブル紙やモロッコ革も“教材”として買い求めた。

戦時中 燃跡から半ばこけて消防の水でふかふかになつた本を拾い出し、羊皮紙に似た三味線の革で製本

ルリュールをひとつの芸術の領域として畏敬の念を抱いていた。

『建築は徹頭徹尾「物」なんだ。そしてわれわれの

仕事が空虚では「物」の取扱い批評などの技術、「二元法」というしかないなら「物」への理解から入魂、そういうう  
自覚を身につけていよいよこづつくれるだろう。つ

たしの建築家渡世の半分はそうした素材のいのちに  
こつちのいのちを通わせ、共感の讃歌をうたいあげる。

そういう「物」を搜し求めて過ぎてきたといつてもよい。「物」の執念がうよ？ それは二つとも建築家といふ。

そういう「物」を探し求めて過ぎてきたといつてもよい。「物」への執念というなら、それはそのまま建築への執念だろう。（中略）「もの」を謙虚に自分の身内のものとする。そこから人間をメジャーとした建築創作

と物との絶対な関係をしつかりつかむということだ。」  
これは白井晟一が建築について語つたものである。

「」での「物」は素材に直結する。

素材を選び、活かし使う。ディテールの追求は妥協なく繊細であるが、それに偏りすぎず全体を俯瞰してトータルのデザインを生み出す。この創作過程での行き来は簡単なようで難しいわけだが、これを柔軟に行うことによって長けた建築家であつたようだ。これは丁にも言えることである。

ちなみに好んで装丁の際用いた紙はレンケルレイドで、小さな竹尾製の紙の見本帳をいつも身近においていた。

した住宅を移築（一部増築設計）する仕事を得た。この住宅はわずか15坪の平屋建小住宅であるが、物理的なボリュームよりはるかに豊かな空間に感じられた。

『試作小住宅』という作品である。

その根底には素材の使い分け構成により生まれた  
れるデザインがあり、何より醸し出す温もりがあった。

期に素材を愛おしむように使い、その結果50年以上もの間ほとんど改変されることなく愛され続け、建築家の意図、思い、そして精神が施主に伝わり、時を経て施主のご子息により移築が決断されるに至ったのである。

祖父である白井晟一が逝ったのは私が10歳のときで、建築について直接教わったことはない。しかし私が生まれ育ったのは祖父の住宅作品の『アトリエ5』であり、その空間に身を置いてきたことで無言

の教えを受けていると感じている。

またこの移築という建築を丸裸にする行為の中でも、物づくりに対しての、図面などからでは知り得ない様々な意志を受け取ることができた。



白井 晟一 しらい せいいち

1905年京都に生まれる。京都高等工芸学校（現・京都工芸繊維大学）卒業。ヨーロッパに留学し、帰国後、建築家としての活動に入る。代表的作品は『旧松井田町役場』「ノアビル」「親和銀行」「渋谷区立松濤美術館」など。高村光太郎賞、建築年鑑賞、建築学会賞、毎日芸術賞、日本芸術院賞などを受賞。『白井晟一の建築』『無窓』などの著作があり、装丁や書においても特筆すべき足跡を残す。1983年逝去。

左写真：移築後の「試作小住宅」 右写真：白井が装丁を手掛けた山本有三の作品（左より『眞実一路』新潮社 1936年、『新篇 路傍の石』岩波書店 1941年、『無事』ほるぶ出版 1972年、『道しるべ』実業之日本社 1948年

『住居は一生の間には度々つくれない。長くもない生涯を、強い風や雨に、或いは地震に堪え、見るからにがっしりとした家で暮らしたいとは誰しも想うことではないかと考える。ロウコオスト（ロークオスト）は建築のエレメントである。しかし、人間の生活や精神を引き上げられるロウコオストでなければならない。』試作小住宅を発表した際の祖父のことばであるが、建築を経てこのことばが現実のものとなつたように思う。

祖父の装丁の多くは無彩色の素材と文字で形づくりされる。無彩色の容れ物の中から、中身の作品世界が立ち上がつてくる。

読む、見るという行為から作品世界を感じることに重きをおくから、装丁に余計な色をつけないことは必然とも感じるが、世の中では無彩色の装丁は少ない。

自身の作品集である『白井晟一の建築』（中央公論社）では、艶のない黒いクロスを貼ったケースの中から、フランス装の本が現われる。開いてみるまで厚表紙本に見えるけれども、そうではなく、厚表紙は保護ジャケットの形になっている。この構造上の工夫によって、大きな重い本を扱うときに感じさせられるがちな抵抗感は、完全に消されている。

本を手に取り読むまでの行為の中にストーリーを感じるわけである。

建築においても例えば、玄関から入り主たる部屋に直接通じるような動線をつくることはまずなく、前室を設けたり、アールや斜めの壁により次の部屋へと導き、否応なく期待感が膨らむような空間構成を作りだす。

書物における手にとって開くまでの行為と、建築における空間を移動する行為に共通性を感じるわけである。

「物質的」であるのに対し、書物は「精神的生活の容れ物」であり、大きさは違つても作り上げるとき大切にすべきことは同じであると考えていたようだ。

建築、装丁と並び祖父の作品として知られるものに『書』があるが、書は自由なる生命のリズムであり対象にとらわれることなく自己に直結した藝術といえる。

建築にしても装丁にしても全てを自らの手で完結出来るものではない。施主や職人と触れ合い、人を介して具現化する物作りの面白さもあるわけだが、芸術家としてバランスを保ち新たな創造をする為には自己完結し己と向き合う時間が必要である。

幼少期に黄檗山万福寺で手習いを受け、晩年は建築以上に精神を傾けていたと言つても過言ではない書。無地の紙に踊る黒い墨文字のバランスは祖父にとつて建築と装丁という創作を結ぶものであつたようだ。

#### 参考文献

『発心』柄折久美子ルリユール展カタログに寄せて 1975年  
『白井晟一 建築とその世界』世界文化社 評論・川添登 1978年  
季刊「暮らしの創造」『極彩色と無彩色』製本家・柄折久美子  
1980年6月 1982年1月



白井 原多 しらい げんた

1973年東京生まれ。

多摩美術大学建築学科卒業後、設計事務所勤務を経て、2000年より白井晟一建築研究所。  
<http://www.sirai-atelier5.org/>



## ガイドボランティアリポート⑨ 記念館で活動中のガイドボランティアより交代でリポートをお届けします

### 一期一会のスポット

三鷹の貴重な文化財である「山本有三記念館」を短時間内で、説明できるのかと苦慮しています。見学者が帰宅後に、この記念館の「回想」が強く心の中に残るような説明ができればと考慮しています。

記念館の来館者は

- ①山本有三に関心がある
- ②建物に興味がある
- ③その他

と分類することができます。全ての見学者に共通点があり、それは、文化財の保存と保護については、強い関心を持っていることです。

(佐藤 熊)

### 記念館の煙突に想う

子供の頃、クリスマス・イヴにはプレゼントを持ったサンタクロースが夜中に煙突から入って来るというお話を聞いた。それから幾歳月。今、記念館の正面中央・玄関横にそびえる、建物の顔ともいえる煙突を眺めると、これなら“お話”にも“画”にもなりそうと思う。

ガイドになって知ったのが、この建物の施主清田龍之助の経歴。父親は牧師。彼も「立教」を出た後、米国でケニヨン大学、エール大学大学院を卒業している。それならサンタクロースの訪れる煙突のデザインも可でしょうか。

(高橋 佳子)

### 事業報告

#### 講演会「世界文学としての有三戯曲」 2月3日開催



企画展「山本有三の文学修行」(2012年9月～2013年2月)の関連講演会を、三鷹ネットワーク大学との共催で行いました。講師の繩田雄二先生(中央大学教授・左写真)は近現代ドイツ文学、現代ドイツ思想がご専門ですが、歌舞伎や日本の近代演劇史にも造詣が深く、有三戯曲とも関係の深い歌舞伎俳優のエピソードなどもお話をいただきました。

有三戯曲を電信・写真・映画・ラジオといったメディアの発達と関連付けながら読むことで、世界文学という大きな枠組みの中に位置付けることができるという指摘は、とても興味深いものでした。

#### 春の朗読コンサート 5月18日開催

2009年に始まった朗読コンサートも、今年で5回目を迎えました。出演は語り手・朗読家の野田香苗さん(写真右)と、クラリネット奏者の人見剛さん(写真左)です。



時に悲しく、時に軽やかに読み上げられる有三作品に重なるクラリネットの豊かな響き。文学と音楽が見事に調和した、中身の濃いプログラムとなりました。

### 本の紹介

山本有三に関する新刊本をご紹介します。

#### ◆平林文雄 著

記念館にて販売中

#### 『山本有三研究—中短編小説を中心』



長編作家としての印象が強い有三の短編は数が少ないこともあり、あまり知られていない。「兄弟」「子役」「チョコレート」「瘤」「不惜身命」「無事の人」を取り上げ、長編小説に劣らない芸術性を持った中短編小説の魅力を解説する。

和泉書院 2012年 定価 3,990円

#### ◆鈴木琢磨 編著

#### 『日本国憲法の初心—山本有三の「竹」を読む』



戦後間もない1948年刊行の『竹』は、発行元である細川書店の気概を感じさせる上質な装幀である。毎日新聞編集委員の著者が『竹』の成り立ちを取材し、復刊までの道のりを記す。有三の憲法草案と、評論家の佐高信氏との対談も併録。

七つ森書館 2013年 定価 1,680円

## 編集・発行 三鷹市山本有三記念館

〒181-0013 東京都三鷹市下連雀2-12-27 電話 0422-42-6233 ホームページ <http://mitaka.jpn.org/yuzo/>

開館時間：午前9時30分～午後5時

休館日：月曜日及び年末年始(12月29日～1月4日) \*月曜日が祝日の場合は開館し、翌日と翌々日を休館。

入館料：300円(20名以上の団体200円) \*中学生以下、障害者手帳持参の方とその介助者、校外学習の高校生以下と引率教諭は無料。

アクセス：JR中央線「三鷹駅」南口より徒歩12分、JR中央線・京王井の頭線「吉祥寺駅」南口(公園口)より徒歩20分